

宮沢賢治作

# 虔十公園林

朗読 伊藤節子

第四卷 1. 宮沢賢治「虔十公園林」



宮沢賢治（みやざわ けんじ）

1896年（明治29） - 1933年（昭和8）。岩手県花卷市生まれ。生家は質屋と古着商を営む裕福な商家で、仏教信仰の篤い家庭環境の中で育った。盛岡中学、盛岡高等農林学校を卒業。東北農民の貧しい現実を目を向け、自ら農耕に従事すると共に、短歌や童話の創作に精力的に取り組む。代表作は本編の他に「雨ニモマケズ」の詩集をはじめ「銀河鉄道の夜」「風の又三郎」、「水仙月の四日」「オツペルと象」などがある。

「虔十公園林」は、「いつもハアハア笑っていて馬鹿にされていた虔十は、ある日、杉苗を植えることを思い付く。邪魔だと言われながらも懸命に育てた杉林は、子供たちの格好の遊び場となり、彼の死後も永く愛されていく」という話。文中の「なにが偉くてなにが偉くないか、まったく分かんなくなる」との記念公園林を発案する若き博士の言葉は、賢治の思いをよく表している。発表は1934年（昭和9）で、賢治の亡くなった翌年。

「用語解説」

十力（じゅうりき）

仏が具有する10種の知力

橄欖岩（かんらんがん）

鉄やマグネシウムを主成分とした火成岩

虔十けんじふはいつも縄なはの帯をしめてわらって杜もりの中や畑の間をゆっくりあるいてゐるの  
でした。

雨の中の青い藪やぶを見てはよろこんで目をパチパチさせ青ぞらをどこまでも翔かけて行く  
鷹たかを見付けてははねあがって手をたゝいてみんなに知らせました。

けれどもあんまり子供らが虔十をばかにして笑ふものですから虔十はだんだん笑はない  
ふりをするやうになりました。

風がどうと吹いてぶなの葉がチラチラ光るときなどは虔十はもううれしくてうれしくて  
ひとりでに笑へて仕方ないのを、無理やり大きく口をあき、はあはあ息だけついてごまか  
しながらいつまでもいつまでもそのぶなの木を見上げて立ってゐるのでした。

時にはその大きくあいた口の横わきをさも痒かゆいやうなふりをして指でこすりながらは  
あはあ息だけで笑ひました。

なるほど遠くから見ると度十は口の横わきを搔かいてゐるか或あるいは欠伸あくびでもしてゐるか  
のやうに見えましたが近くではもちろん笑つてゐる息の音も聞えましたし唇くちびるがピク  
ピク動いてゐるのもわかりましたから子供らはやっぱりそれもばかにして笑ひました。

おつかさんに云いひつけられると度十は水を五百杯でも汲くみました。一日一杯畑の草もと  
りました。けれども度十のおつかさんもおとうさんも仲々そんなことを度十に云ひつけよ  
うとはしませんでした。

さて、度十の家のうしろに丁度大きな運動場ぐらゐの野原がまだ畑にならないで残つて  
ゐました。

ある年、山がまだ雪でまっ白く野原には新らしい草も芽を出さない時、度十はいきなり  
田打ちをしてゐた家の人達の前に走つて来て云ひました。

「お母があ、おらさ杉苗七百本、買つて呉けろ。」

虔十のおっかさんはきらきらの三本<sup>さんぼんぐは</sup>鋤を動かすのをやめてじつと虔十の顔を見て云ひました。

「杉苗七百ど、どごさ植らい。」

「家のうしろの野原さ。」

そのとき虔十の兄さんが云ひました。

「虔十、あそごは杉植でも成長<sup>おが</sup>らない<sup>ところ</sup> 処<sup>ところ</sup>だ。それより少し田でも打って助<sup>す</sup>ける。」

虔十はきまり悪さうにもちもちして下を向いてしまひました。

すると虔十のお父さんが向ふで汗を拭<sup>ふ</sup>きながらからだを延ばして

「買ってやれ、買ってやれ。虔十あ今まで何一つだて頼んだごとあ無いがったもの。買ってやれ。」と云ひましたので虔十のお母さんも安心したやうに笑ひました。

虔十はまるでよろこんですぐにまっすぐに家の方へ走りました。

そして納屋から唐鋤たうぐはを持ち出してぼくりぼくりと芝を起して杉苗を植ゑる穴を掘りはじめました。

虔十の兄さんがあとを追って来てそれを見て云ひました。

「虔十けんじふ、杉あ植る時、掘らないばわがないんだぢや。明日まで待て。おれ、苗買って来てやるがら。」

虔十はきまり悪さうに鋤くはを置きました。

次の日、空はよく晴れて山の雪はまっ白に光りひばりは高く高くのぼってチーチクチーチクやりました。そして虔十はまるでこらへ切れないやうにこにこ笑って兄さんに教へられたやうに今度は北の方の塚さかひから杉苗の穴を掘りはじめました。実にまっすぐに実の間隔正しくそれを掘ったのでした。虔十の兄さんがそこへ一本づつ苗を植ゑて行きました。

その時野原の北側に畑を有もつてゐる平二がきせるをくはへてふところ手をして寒さうに

肩をすぼめてやって来ました。平二は百姓も少しはしてゐましたが実はもっと別の、人いやがられるやうなことも仕事にしてゐました。平二は虔十に云ひました。

「やい。虔十、此処ここさ杉植るなてやっぱり馬鹿ばかだな。第一おらの畑あ日影にならな。」

虔十は顔を赤くして何か云ひたさうにしましたが云へないでもちもぢしました。

すると虔十の兄さんが、

「平二さん、お早うがす。」と云つて向ふに立ちあがりましたので平二はぶつぶつ云ひながら又のつそりと向ふへ行つてしまひました。

その芝原へ杉を植ゑることを嘲笑わらつたものは決して平二だけではありませんでした。あんな処に杉など育つものでもない、底は硬い粘土なんだ、やっぱり馬鹿は馬鹿だとみんなが云つて居をりました。

それは全くその通りでした。杉は五年までは緑いろの心しんがまつすぐに空の方へ延びて

行きましたがもうそれからはだんだん頭が円く変って七年目も八年目もやっぱり丈が九尺ぐらゐでした。

ある朝虔十が林の前に立つてゐますとひとりの百姓が冗談に云ひました。

「おゝい、虔十。あの杉あ枝打ちささないのか。」

「枝打ちていふのは何だい。」

「枝打ちつのは下の方の枝山刀で落すのさ。」

「おらも枝打ちするべがな。」

虔十は走って行って山刀を持って来ました。

そして片っぱしからぱちぱち杉の下枝を払ひはじめました。ところがたゞ九尺の杉ですから虔十は少しからだをまげて杉の木の下にくぐらなければなりませんでした。

夕方になったときはどの木も上の方の枝をたゞ三四本ぐらゐづつ残してあとはすっかり



払ひ落されてゐました。

濃い緑いろの枝はいちめんに下草を埋めその小さな林はあかるくがらんとなってしまひました。

虔十は一ぺんにあんまりがらんとなつたのでなんだか気持ちが悪くて胸が痛いやうに思ひました。

そこへ丁度度十けんじふの兄さんが畑から帰つてやつて来ましたが林を見て思はず笑ひました。そしてぼんやり立つてゐる虔十にきげんよく云ひました。

「おう、枝集めべ、いゝ焚たぎものうんと出来だ。林も立派になつたな。」

そこで虔十もやつと安心して兄さんと一緒に杉の木の下にくぐつて落した枝をすつかり集めました。

下草はみじかくて奇麗でまるで仙人たちが碁ごでもうつ処のやうに見えました。

ところが次の日度十は納屋で虫喰ひ大豆まめを拾ってゐましたら林の方でそれはそれは大きなわぎが聞えました。

あつちでもこつちでも号令をかける声ラツパのまね、足ぶみの音それからまるでそこら中の鳥も飛びあがるやうなどつと起るわらひ声、度十はびっくりしてそつちへ行つて見ました。

すると愕おどろいたことは学校帰りの子供らが五十人も集つて一列になつて歩調をそろへてその杉の木の間を行進してゐるのです。

全く杉の列はどこを通つても並木道のやうでした。それに青い服を着たやうな杉の木の方も列を組んであるいてゐるやうに見えるのですから子供らのよろこび加減と云つたらとてもありません、みんな顔をまっ赤にしてもずのやうに叫んで杉の列の間を歩いてゐるのです。

その杉の列には、東京街道ロシヤ街道それから西洋街道といふやうにずんずん名前がついて行きました。

虔十もよろこんで杉のこっちにかくれながら口を大きくあいてはあはあ笑ひました。

それからもう毎日毎日子供らが集まりました。

たゞ子供らの来ないのは雨の日でした。

その日はまつ白なやはらかな空からあめのさらさらと降る中で虔十がたゞ一人からだ中ずぶぬれになって林の外に立ってゐました。

「虔十さん。今日も林の立番だなす。」

その<sup>みの</sup>蓑を着て通りかゝる人が笑つて云ひました。その杉には<sup>とび</sup>鳶色の実がなり立派な緑の枝

さきからはすきとほったつめたい雨のしづくがポタリポタリと垂れました。虔十は口を大きくあけてはあはあ息をつきからだからは雨の中に湯気を立てながらいつまでもいつまで

もそこに立ってゐるのでした。

ところがある霧のふかい朝でした。

虔十は萱場かやばで平二といきなり行き会ひました。

平二はまはりをよく見まはしてからまるでおほかみ狼のやうないやな顔をしてどなりまし

た。

「虔十、貴さんどこの杉伐きれ。」

「何なしてな。」

「おらの畑あ日かげにならな。」

虔十はだまつて下を向きました。平二の畑が日かげになると云つたつて杉の影がたか

で五寸もはひつてはゐなかつたのです。おまけに杉はとにかく南から来る強い風を防いでゐるのでした。

「伐れ、伐れ。伐らないが。」

「伐らない。」度十が顔をあげて少し怖さうに云ひました。その唇くちびるはいまにも泣き出

しさうにひきつってゐました。実にこれが度十の一生の間のことの一つの人に対する逆ら

ひの言ことばだったのです。

ところが平二は人のいゝ度十などにばかにされたと思つたので急に怒り出して肩を張つたと思ふといきなり度十の頬ほほをなぐりつけました。どしりどしりとなぐりつけました。

度十は手を頬にあてながら黙ってなぐられてゐましたがたうとうまはりがみんなまつ青に見えてよろよろしてしまひました。すると平二も少し気味が悪くなつたと見えて急いで腕を組んでのしりのしりと霧の中へ歩いて行ってしまひました。

さて度十はその秋チブスにかかつて死にました。平二も丁度その十日ばかり前にやっばりその病気で死んでゐました。

ところがそんなことには一向構はず林にはやはり毎日毎日子供らが集まりました。

お話はずんずん急ぎます。

次の年その村に鉄道が通り虔十の家から三町ばかり東の方に停車場ができました。あちこちに大きな瀬戸物の工場や製糸場ができました。そこらの畑や田はずんずん潰つぶれて家がたちました。いつかすつかり町になってしまったのです。その中に虔十の林だけはどう云ふわけかそのまま残って居りました。その杉もやっと一丈ぐらゐ、子供らは毎日毎日集まりました。学校がすぐ近くに建ってゐましたから子供らはその林と林の南の芝原とをいよいよ自分らの運動場の続きと思つてしまひました。

虔十のお父さんももうかみがまっ白はずでした。まっ白な筈はずです。虔十が死んでから二十年近くなるではありませんか。

ある日昔のその村から出て今アメリカのある大学の教授になつてゐる若い博士が十五年

ぶりで故郷へ帰って来ました。

どこに昔の畑や森のおもかげがあつたでせう。町の人たちも大ていは新らしく外から来た人たちでした。

それでもある日博士は小学校から頼まれてその講堂でみんなに向ふの国の話をしました。お話がすんでから博士は校長さんたちと運動場に出てそれからあの度十の林の方へ行きました。

すると若い紳士は愕おどろいて何べんも眼鏡めがねを直してみましたがつうとう半分ひとりごとのやうに云ひました。

「あゝ、こゝはすっかりもとの通りだ。木まですっかりもとの通りだ。木は却かへって小さくなったやうだ。みんなも遊んでゐる。あゝ、あの中に私や私の昔の友達が居ないだらうか。」

博士は俄にはかに気がついたやうに笑ひ顔になって校長さんに云ひました。

「こゝは今は学校の運動場ですか。」

「いゝえ。こゝはこの向ふの家の地面なのですが家の人たちが一向かまはないで子供らの集まるまゝにして置くものですから、まるで学校の附属の運動場のやうになってしまひましたが実はさうではありません。」

「それは不思議な方ですね、一体どう云ふわけでせう。」

「こゝが町になってからみんなで売れ売れと申したさうですが年よりの方がこゝはけんじふ度十のたゞ一つのかたみだからいくら困つても、これをなくすることはどうしてもできないと答へるさうです。」

「ああさうさう、ありました、ありました。その度十といふ人は少し足りないと私らは思つてゐたのです。いつでもはあはあ笑つてゐる人でした。毎日丁度この辺に立って私らの



遊ぶのを見てゐたのです。この杉もみんなその人が植ゑたのださうです。あゝ全くたれが  
かしこくたれが賢くないかはわかりません。たゞどこまでも十力じふりきの作用は不思議です。  
こゝはもういつまでも子供たちの美しい公園地です。どうでせう。こゝに虔十公園林と名  
をつけていつまでもこの通り保存するやうにしては。」

「これは全くお考へつきです。さうなれば子供らもどんなにしあはせか知れません。」

さてみんなその通りになりました。

芝生のまん中、子供らの林の前に

「虔十公園林」と彫った青い檄かんらんがん 岩の碑が建ちました。

昔のその学校の生徒、今はもう立派な検事になったり将校になったり海に向ふに小さい  
ながら農園を有もつたりしてゐる人たちから沢山の手紙やお金が学校に集まって来ました。

虔十のうちの人たちはほんたうによるこんで泣きました。

全く全くこの公園林の杉の黒い立派な緑、さはやかなにほひ匂、夏のすゞしい陰、月光色の芝生がこれから何千人の人たちに本当のさいはひが何だかを教へるか数へられませんでした。

そして林は度十の居た時の通り雨が降ってはすきとほ徹る冷たいしづく雫をみじかい草にポタリポタリと落しお日さまが輝いては新らしい奇麗な空気をさはやかにはき出すのでした。